明石の史跡（２０）明石の中等教育

日清戦争におけるわが国の勝利は、西欧世界においては驚きとともに、その原因追求に関心が寄せられる。１８９５年（明治２８）５月３日の「ノース・チャイナ・ヘラルド」紙上には、以下のような記事が掲載されている（『外国新聞に見る日本②』６７２頁）。

「日本を理解し、１８９４年から１８９５年にかけて日本が軍事的勝利を収めた原因を理解するためには、過去３０年間続けられた中等教育の効果を考えないわけにはいかない。

（中略）しかし日本が勝利を得た戦闘を見ると、勝利はむしろ戦略、秩序、組織力、軍務服従のたまものだった。日本陸軍が勝利を得た理由は兵隊たちが小学校教育を受け、将校たちが中等・高等学校教育を受けているという事実にあり、「知識は力」と強調する。

大正１１年（１９２２）８月２４日、文部省よりの設立認可にもとづいて、明石市立中学校が創設され、翌年４月８日に開校のはこびとなる。自費によるアメリカ教育視察の経験の持ち主でもある山内佐太郎氏が、初代校長として網干町立実業補習学校長より就任。広く人材をあつめるという方針のもと、寄宿舎を準備したという（『明石市史下』３６３－４頁）。

氏が教育者として傑出していたかは、岡山関西（かんぜい）中学の校長時代の教え子の顔ぶれをみれば、納得できよう。財界総理といわれる経団連会長を、三期六年務めた土光敏夫氏に代表される。土光氏によれば、「国士魂とデモクラシーの調和」を意図されていたという。西欧世界から指摘された「知識は力」の源泉の成立は、第一次大戦後のことである（史料を提供された池内亀蔵氏に謝意を表したい）。

日本歴史学会会員 茨木 一成